Journal of The Human Development Research, Minamikyushu University 2024, Vol. 14 ,7-14

論　文

手あそび曲創作活動の効果と展望
－創造性育成と保育への応用に向けて－

早川　純子

The Effects and Prospects of Fingerplay Song Composition Activity: Towards Fostering Creativity and its Application in Early Childhood Education

Junko HAYAKAWA

キーワード：音楽創作、創造性育成、保育者教育、実践的指導力

概要：本研究の目的は、保育者の資質である創造性を向上させる手段として、手あそび曲創作活動の効果、意義、展望、および課題を明らかにすることである。保育者を目指す学生にとって、手あそび曲を創る過程で、幼児の発達に適した要素を取り入れることが可能であり、実践的な指導力を養う上で、音楽創作活動が重要な役割を果たすことが示唆された。特に、音楽的要素や歌詞、動作の適切さなどが評価され、幼児の理解や興味を引き出す効果が期待される成果が得られた。音楽創作活動が学生の創造性を育む有益な手法であることが示されたが、さらに創作活動の枠組みをより具体的に検討し、幼児の潜在能力を引き出す指導法を探求していく必要がある。

研究の背景

幼児は身振りや表情、そして限られた言葉を使って自分の世界を伝えようとし、模索しながら表現手段を獲得していく。この幼児期において、幼児が自分の感情や思考、意図を他者に伝え、表現する自己表現力を育てるためには、様々な体験を通じて、想像力を働かせながら、表現意欲や感性を育んでいくことが重要だ。豊かな体験が感情や思考の土台となり、多様な自己表現や表現力の向上が可能となっていく。

他者との関わりを活発化させコミュニケーション力を発達させる幼児期において、保育者の役割は極めて重要となる。保育者は幼児の主体的な自己表現を促し、感情の発達やコミュニケーション能力の向上を支える役割がある。そのため、保育者また保育者養成課程の学生は、自らの表現技術を高め、幼児の創造的な表現を支える力を身につけておく必要がある。「学生自らが表現者となり実践すること」が必要であり、そのことが「保育内容を理解し、技術を習得する」ことにもつながる (甲斐他 2020、駒 2010)。つまり、保育者の役割を理解して学生が自らの表現力を磨くことが、幼児の感情や思考の発達に寄与し、コミュニケーション能力の向上を促進する重要な要素となる。

そこで本研究では、幼児の創造性を引き出し自己表現力を高めるための指導力向上を目的とした、学生の創造性の育成に焦点を当てる。

創造性をテーマとした音楽創作活動については、音楽表現の指導実践や研究に比べると、実践研究が比較的少ないことが指摘されている（薩摩林 2008:76）。創作活動の実践研究については、ミュージカルやオペレッタ、おとあそびによる創作等が散見される。例えば、薩摩林 (2008) による「物語を音楽で表現する活動」では、楽器や身の回りのものを用いて効果音を加えながら物語を元に音楽作品を完成させる活動を行なっている。この活動を通して、学生が創作することの楽しさや意義を見出した、音や音色に対する興味関心が深まった、自発的に取り組む姿勢が培われた、などの効果が示されている。麓 (2015) の「総合表現として発展させた舞台作品作り」の活動では、学生が幼児の発達や特性に合わせてアレンジするための視点や方法、理論が習得された。樋口 (2018) が実践した、作曲の基礎教育をもとにした「こどものうた」創作活動では、学生が自分で創作したことへの自信や喜びを感じている。北浦 (2029) による「表現創作（作曲）の授業改善方策の検討」では、専門的な知識の習得や今後の表現活動への展開に一定の評価が得られたことが認められた。このように、創作活動を通じて学生の意識が変化し、新たな知識や技能の習得が実現していることに加え、感性や表現力の向上にも寄与していることが示されている。この成果から、音楽創作に関する研究が一層活発になることが望まれる。

研究の目的と研究方法

本研究では、学生の創造性育成をテーマとするが、まず「創造性」の概念について明確にしておきたい。保育者を目指す学生の創造性を育てる、という観点で考えれば、以下の３つの要素が考えられる。

独自性（Originality）：自分らしい音楽性を築いて、リジナルの音楽が構成できているか。

新規性（Novelty）：新しい音楽要素やアイデアが取り入れられているか。

応用力（Applicability）：幼児の日常生活や学びにつながるように音楽を構成する力があるか。音楽を通して、発達段階に応じた言語能力、運動能力、社会性などの発達を促すことができているか。

以上の３点を本研究における「創造性」の意味合いとして位置付け、学生の創作課題の評価の視点とする。いうまでもなく、これらの創造性は、幼児の興味や発達段階、ニーズや興味関心にも対応する必要があり、幼児が音楽を楽しみながら学ぶ機会を提供するものでなければならない。

以上のことを踏まえ、本研究の目的を、保育者の資質である創造性を向上させる方法の一つとして、手あそび曲の創作活動を取り上げ、その効果、意義、展望、および課題を示すこととする。

研究対象は、南九州大学の令和５年度「保育内容指導法（音楽表現）」の授業で受講者が作詞作曲した手あそび曲の楽譜（譜面・歌詞・ねらい）である[1]。

創作課題作成上の指示内容について、先行研究では一定の枠組みを示したものが多い。例えば、薩摩林（2008）では、わらべうたの音組織をヒントにさせたり、北浦（2019）は「子どもの何気ないつぶやきを題材にした節づくり」をさせたり、樋口（2018）でも「子どもの印象に残る言葉を記録」させ、その言葉をもとに作詞させたり、わらべうたのような民謡音階の５音音階（ペンタトニックスケール）の５音のみを使わせる、などの条件やヒントが与えられている。

一方、本研究が対象とする手あそび創作課題では、曲の長さは４小節以上であることとレイアウト以外、特定の枠組みは明示しなかった。一方で、わらべうたを含めた手あそび曲の特徴、つまり発達段階に応じた配慮すべき事柄については充分確認を行なった。つまり、幼児の声域に合わせること（概ね C4-D5）、狭い音域であること（概ね１オクターブの範疇に収める）、跳躍は少ないこと、などである。また、メロディ以外に、歌詞と遊び方、ねらいを示すことを指示した。

作品完成に至るまで、学生はまず下書きを作成し、筆者が添削を行う。記譜に関する間違いで目立つのは、音部記号（ト音記号）が正しく書けていなかったり、不完全小節（音符や休符の選択の間違い）になっていたり、響きとして不自然なところ（和声音や非和声音の拍の位置、調号と実音の不一致、臨時記号の使い方）等である。なお、本人に直接聞かなければ添削が難しい場合は、ヒアリングをして助言を行いながら修正を行った。その後提出された清書を印刷、製本し、配布後に、学生はペアで練習を行い、授業最終週の発表会で自演した。

課題内容についての評価の観点は、以下の通りである。

音楽的要素

メロディとリズム：子どもにとって覚えやすく、楽しいものであるか。

音程：子どもの声域に合っているか。

歌詞

分かり易さ：子どもが理解しやすく、年齢に合った言葉が使用されているか。

教育的要素：新しいことを学ぶ要素を含んでいるか。

楽しさや魅力：楽しさや興味を引く要素を含んでいるか。

ねらい（目的）

教育的ねらい：何かを教えたり、発達を促すことを意図しているか。

楽しさ：子どもの意欲を高めるための楽しさがあるか。

動作（振り付け）

動作の適切性：動作が安全で簡単に実行できるか。

子どもの意欲：積極的な参加を促し、運動能力を発展させる役割を果たしているか。

なお、課題を実施した当該科目は保育者を目指す学生の３年次必修科目である。履修に至るまで、学生は１年前期に選択科目で、楽典、ソルフェージュ、歌唱法を学び、後期にピアノ実技の基礎を、２年後期にピアノ実技の応用を学ぶ。そして３年次、当該科目と同時進行で、教育実習を意識した

1　当該授業では新型コロナの影響で一時実施を見送った年もあったが、例年手あそび創作課題を課し、曲集にまとめ授業内で披露している。

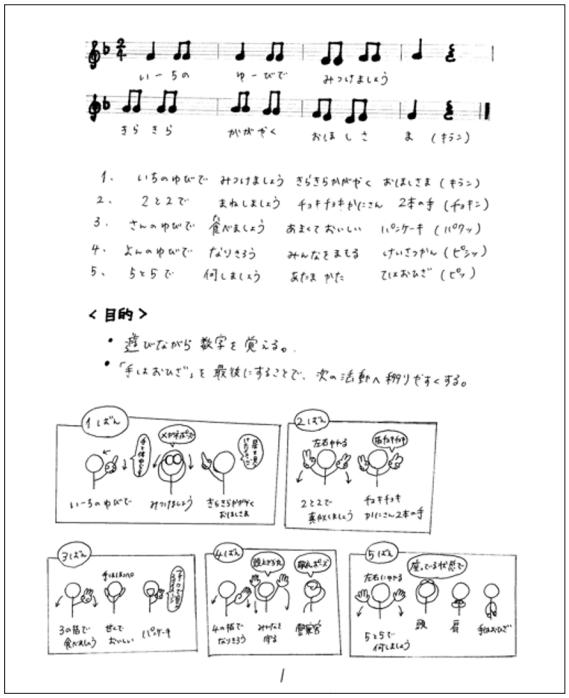
ピアノ実技の実践を経験する。同後期には、選択科目で器楽合奏や音楽療法の方法も学ぶ。これらの音楽科目の受講を通して、保育者を目指す学生が、自らの感情や考えを音楽を通して表現する方法を学び、実践的な指導力を養い、子どもの感受性や発達に対する理解を深めながら、保育現場での実践的な指導力を身につけていく。本研究の対象となる、楽曲の創作は、音楽活動の中で最も難易度の高い活動である。つまり、音楽的基礎を身につけ、応用力を培ったうえで、保育現場で実践できる高度な力量の獲得を目指したものだ。

研究内容

令和５年度は、受講者数と同じ計 49 曲の作品が誕生した。その中から、改善点が分かりやすく表れているものや保育現場での実践に適う水準にあると言えるであろう 12 作品を選び、音楽的要素を中心に評価を行いたい。

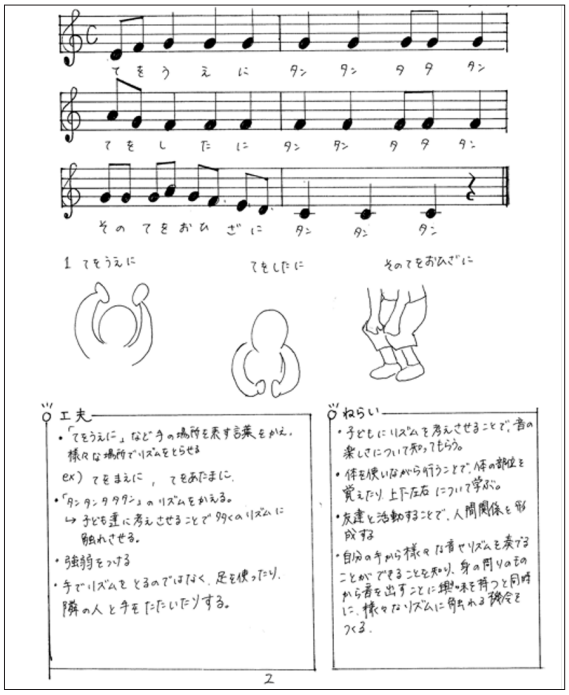
（● ＝良い点、■ ＝改善点）

１．「なにしよう？」



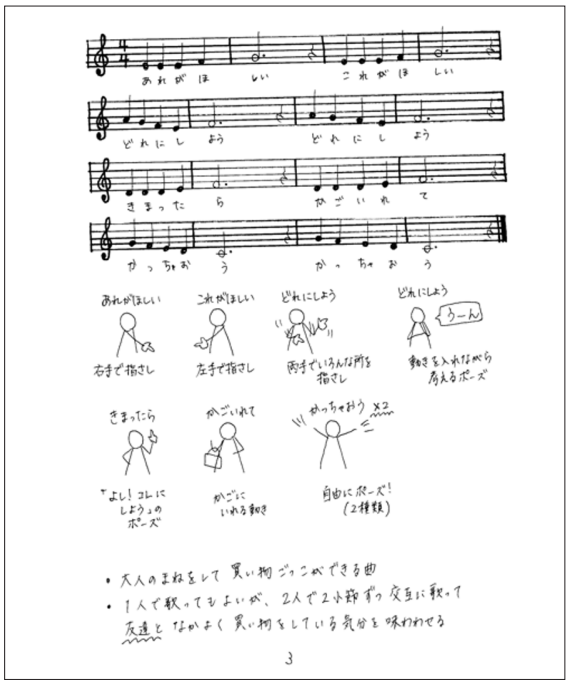
- 音域が狭く、少ない音で構成されているため歌いやすい。
- ♩♫、♫♫、などの単純な音型の反復により統一感が生まれ、歌いやすさや覚えやすさにもつながっている。
- 「手はおひざ」で、次の活動へのスムーズな移行が図られている。
- 数字と動きなどと関連付けられ、視覚的要素や体の動きが活用されることで、歌詞の理解が深まり、運動能力が促進される。
- 楽しみながら数字を覚えられる。

２．「てをうえに」



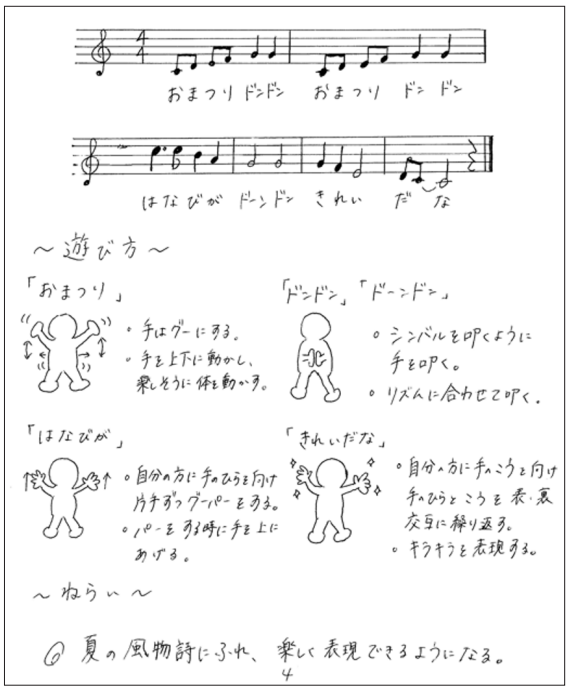
- 「うえに」が上行型、「したに」が下行型になっており、歌詞とメロディの動きが一致している。
- 上行型と下行型が、反行しており音楽的なバランスが取れている。
- 上下、左右の概念を学び空間認識を促す工夫がなされている。
- 同一音程にとどまる部分が多く、リズムに集中しやすい。
- 終盤は順次進行で下行し、最終小節は主音の連続により、安定感が生まれている。
- 全体的に、シンプルな作りで分かりやすい。

3．「たのしいおかいもの」



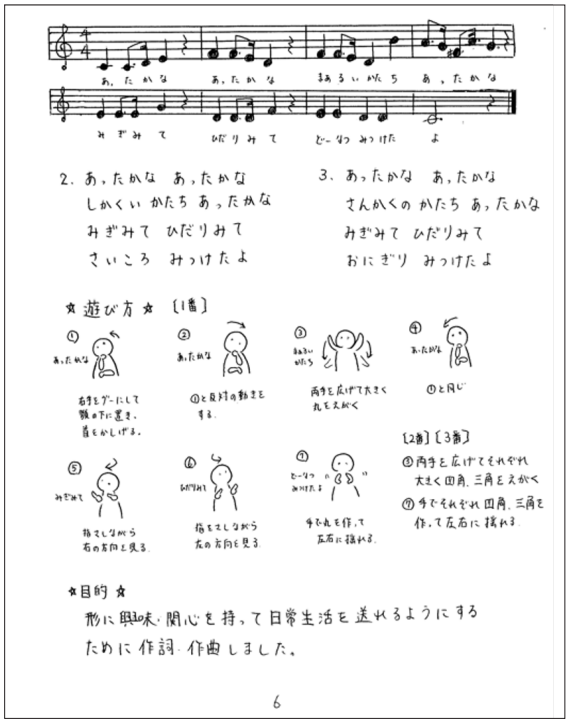
- 歌詞は、買物における選択のプロセスが学べる内容となっており、社会的スキルや日常生活の理解を促している。
- ■　軽快感を出すためには、拍子は 4/4 拍子よりも 2/4 の方が相応しいだろう。
- ■　既存の「やまびこさん」の節が散見されるのと、同曲の追いかけっこという形態も類似している。
- ■　「買っちゃおう」という独り言のような表現には少し後ろめたさも感じられて特徴的だが、やや唐突な印象を受けるため、葛藤や保護者との交渉などの雰囲気が加えられても良かったかもしれない。

4．「おまつり」



- 言葉のリズムや意味合いとメロディの動きが一致し、調和している。
- 「どんどん」という言葉の反復は楽しさや夏祭りの雰囲気を感じさせる。
- 季節に関する理解を深めることができる。
- ■　最後の小節（トニックで解決）が非和声音（倚音）で始まっているため、安定性に欠ける。1拍目の強拍には非和声音ではなく、和声音（この場合は主音）にした方が、終結感も生まれる。例えば、最後から２小節前を全て四分音符で構成し、歌詞の「きれいだ」を当てはめる。そして最終小節は、付点２分音符にして歌詞の「な」を当て、四分休符で締めくくるとより明快になる。

5.「あったかな」

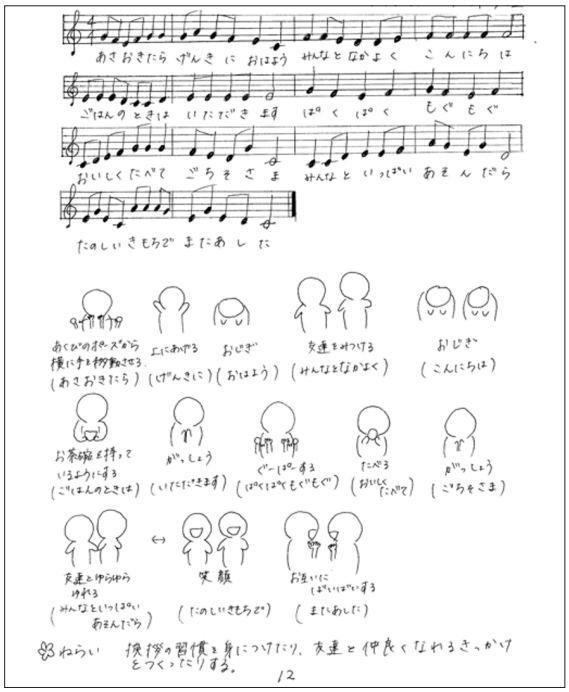


■　３小節目の６度の跳躍は、幼児にはやや難しいかもしれない。

●　４小節目２拍目は、臨時記号による借用和音（属調の属和音）が導入され、楽曲にアクセントが加わっている。

●　日常の身近なものを通して、形に関する興味を育むことができる。

6.「あいさつできて いいこだね」

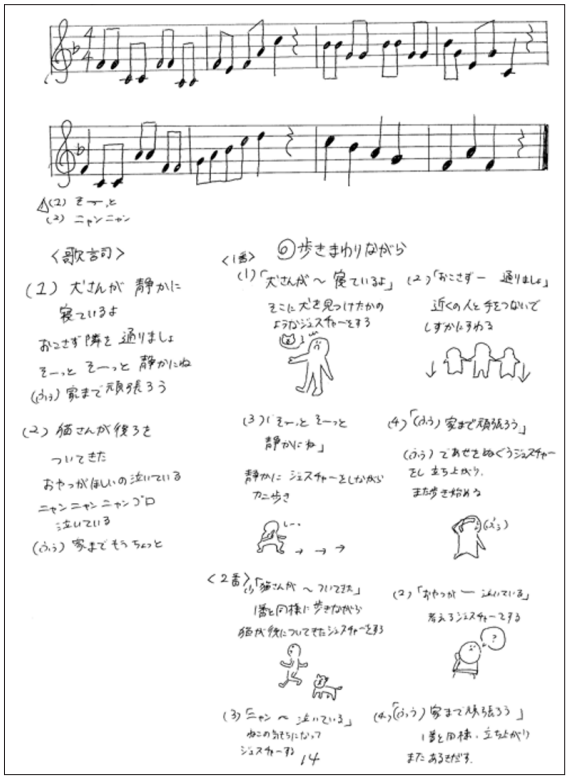


●　挨拶の習慣を身につけ、食事のマナーを教えるのに役立つ。

■　冒頭から８分音符で刻まれ軽快さが表現されていたが、「ぱくぱく　もぐもぐ」では突如４分音符となり音価が長くなった影響で、音楽的にはややブレーキがかかったような印象を受ける。作者は、ここでゆっくり咀嚼することをイメージしたのかもしれない。

■　「ごちそさま」は、丁寧に→「そう」とするために、「そう」に対応するＤ音とＧ音を付点のリズムにすると不自然さはなくなるだろう。

7.「かえり道」

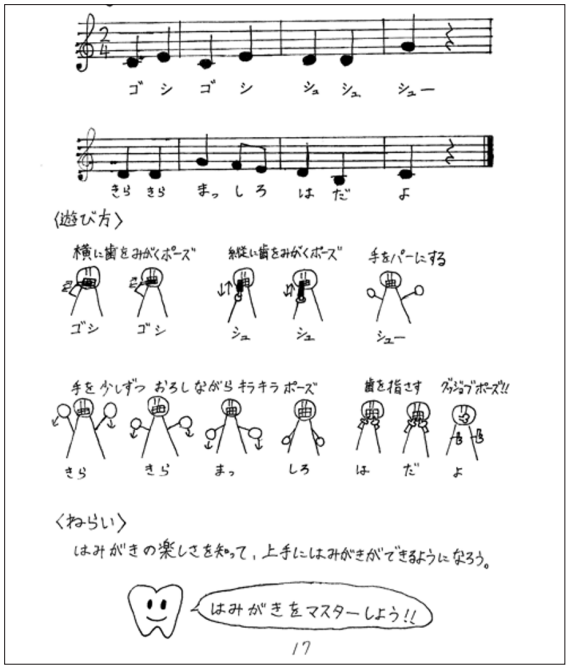


■　跳躍が多いため、子どもにはやや歌いにくい。既存のクラシック曲のメロディ[2]に著しく類似しているが、その曲は器楽曲のため音の変化が激しく、歌唱向きではない。その点で、独自性に欠ける。

●　ねらいが無記入だが、動物に対する理解と思いやりを育てる、という意図が感じられる。

2　Mozart,K525《Eine Kleine Nacht Musik》。

8.「ハブラシの歌」

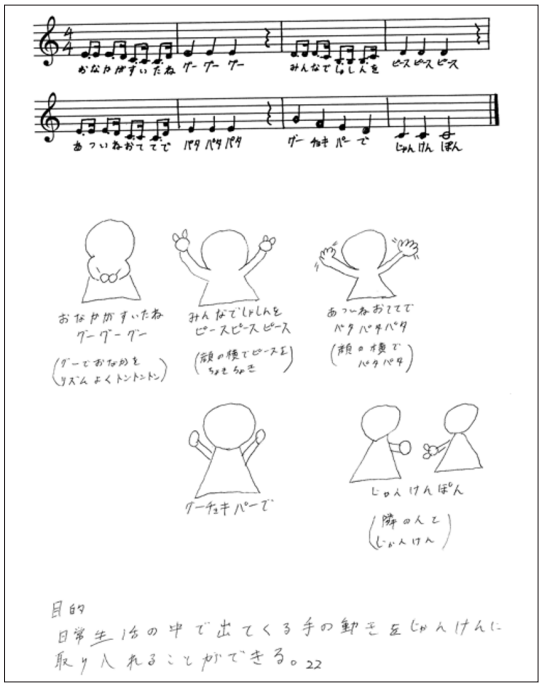


■　歯磨きの習慣を身につけさせ、清潔な歯を保つ重要性を強調するためには、タイトルを「ハミガキ」にした方が良い。

■　「ゴシゴシ」の C-E-C-E(低 - 高 - 低 - 高) は、音楽的に違和感はないが、言葉のイントネーションに合わせて E-C-E-C(高 - 低 - 高 - 低) とする方がより自然である。

■　「まっしろ」の後に「な」(助詞) を入れるために、「まっし」を付点のリズム、「ろな」を♫で構成すれば、促音と付点のリズムも一致する。

9.「グーチョキパー」

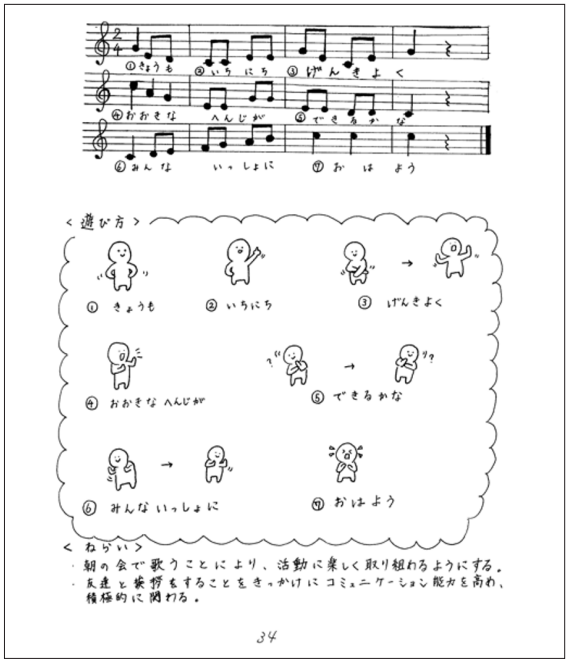


■　低い音域で停滞しているため、キーを高くした方が良い。例えば、幼児曲に多いヘ長調にすれば、E4-C5 の音域で収まり、歌いやすくなる。

●　単純なリズムで、同じ音型が反復されていることにより、歌いやすく覚えやすい。

●　日常生活における手の動きとじゃんけんの形が結びつけられ、じゃんけん遊びの導入として楽しく実践することができる。

10.「みんなでおはよう」

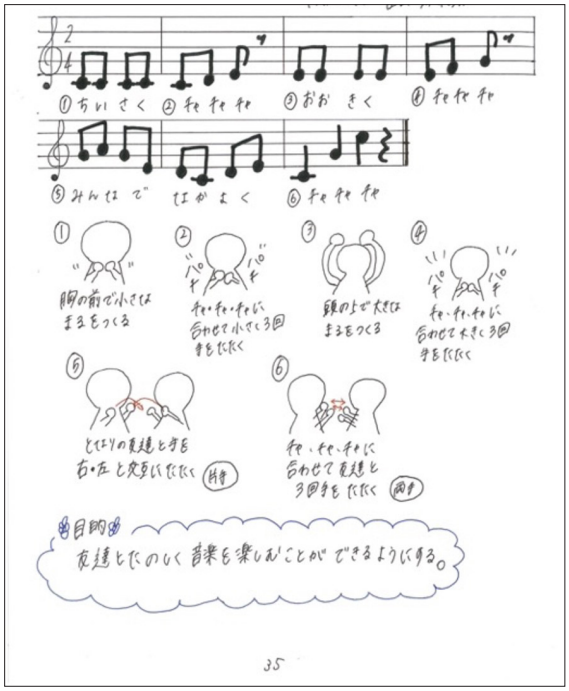


●　言葉の抑揚とメロディの動きが一致し、自然な流れが生まれている。例えば、「げんきよく」のメロディには動きがあり、快活な様子が伝わる。また、「おおきな」のメロディが高音から勢いよく始まっている[3]。

●　終結部では、順次進行の上行型メロディにより、次第に活気が増して大きな声で元気よく挨拶することが表現されている。

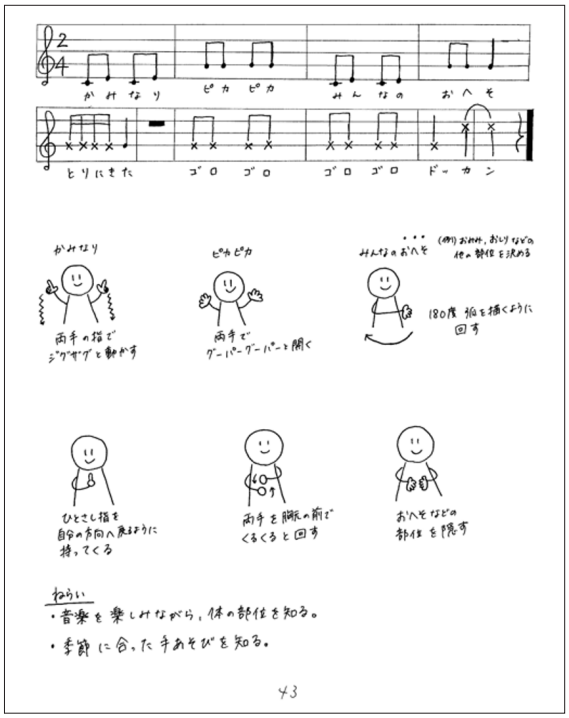
3 「おおきな」の小節は、♩♫の誤りだと思われる。

11.「チャ・チャ・チャ」



- 「チャチャチャ」がリズミカルで愉快な雰囲気を生み出している。
- 「ちいさく」「おおきく」の部分は、歌詞に応じて音高を変化させることで、歌詞とメロディとの調和と対比が図られている。
- 「チャチャチャ」の音型は、最初が「C-D-E」、次が「E-F-G」、最後は跳躍してやや歌い辛いが「C-G-C」と、徐々に高まっていく構成が特徴的である。

12.「ピカピカドッカン」



- 擬音を多用し、無音程で表現する箇所を含めることで、臨場感や迫力、楽しい雰囲気を描写している。
- 想像力を刺激して、自然現象に興味を持たせる効果がある。

考察

完成した全 49 曲中、本研究で取り上げた以上 12 曲の手あそび曲からは課題を含む以下の特徴が認められた。

- 音域は狭く、少ない音で楽曲をシンプルに構成しようという工夫がある。
- 音型の反復による統一感がある。
- 数字と動きなどを関連づけ、視覚的要素や身体の動きを活用して学習体験を豊かにしている。
- 歌詞の「上に」が上行型、「下に」が下行型など、歌詞と旋律の動きを一致させようとしている。
- 上下、左右の概念を学び空間認識を促そうとしている。
- 社会的スキルや日常生活の理解を促そうとしている。
- 言葉の反復による楽しげな響きにより、テーマの雰囲気や魅力が伝わる。
- 臨時記号の使用によりアクセントを効かせている。
- 幼児の声域内であっても、音高が偏らないよ

うにする。

- 日常生活での動作と遊びの中での手の動きを組み合わせ、認知能力や運動能力を促進させる工夫がある。
- 想像力を刺激し、自然現象に興味を持たせる。
- 特に最終小節については、非和声音ではなく和声音で開始する方が終止が安定する。

以上のように、音楽的側面については、適切な音域の中で、さらに狭い音域、単純な音型の繰り返しにより幼児が歌を覚えやすく、取り組みやすくなるような、手あそび曲に相応しい特徴が踏まえられている楽曲が見られた。また、視覚的要素や身体の動きを活用して学習体験を豊かにし、日常生活に役立つスキルや習慣を育む工夫も見られた。さらに、想像力や好奇心を刺激し、興味を喚起する要素が含まれ、友達と一緒に楽しむ活動により協調性や社会性を育む工夫もなされていた。

結論

手あそび曲の創作活動は、学生が幼児の幅広いスキルや能力の育成について考察し、創造性が身につく有益な方法の一つであると言える。そのため、学生の創造性を含む、保育者の資質向上に寄与する可能性が高いと考えられる。

今後は、先行研究で参照したような創作上の枠組みについても導入を検討しながら、創作活動をより具体的かつ実践的に展開し、学生自身が創作活動を通して、保育者としての役割を深く認識し、幼児の未知の可能性を引き出す手助けができる指導力を養うことを目指したい。

謝辞

考察対象とした、手あそび曲の創作に取り組んでくれた学生達に厚く感謝します。

付記

本稿は、「全国大学音楽教育学会 第 38 回九州地区学会」における、口頭発表 (2023 年 9 月 10 日) の内容を再構成して論文にまとめたものである。

参考文献

大田美郁 (2020)「保育者養成における音楽表現としての替え歌創作」『田園調布学園大学紀要』第 15 号 ,pp123-142

甲斐万里子、藤尾かの子、五十嵐睦美、髙橋潤子、長谷川諒 (2022)「子どもの主体的な音表現を支えるための体験的な学習 --- 保育者養成課程の学生を対象とした混合研究法を用いて ---」『音楽教育学』第 51 号第 2 巻 ,pp25-35

駒久美子 (2020)『コンパス 音楽表現』健帛社

北浦恒人 (2019)「保育者養成課程における音楽の指導法研究 --- ルーブリックを活用した「表現創作（作曲）」授業改善方策について ---」『岡崎女子大学・岡崎女子短期大学 研究紀要』第 52 号 ,pp47-56

薩摩林淑子 (2008)「保育者養成校における創造的な音楽表現力の育みに関する一考察 --- 鎌倉女子大学専攻科学生による音楽創作活動を通して ---」『鎌倉女子大学紀要』第 15 号 ,pp75-84

中島龍一 (2018)「五領域「表現」における感性豊かな音楽的表現力のある学生を育成するための一考察 --- ピアノによる劇音楽の作曲書法あるいは演奏技法からのアプローチ ---」『日本体育大学紀要』47-2,pp161-179

樋口光融 (2018)「作曲活動を通じた創造的音楽表現能力を有する保育者養成の実践と考察」『九州大谷研究紀要』第 44 号 ,pp29-38

廣畑まゆ美 (2021)「保育者養成課程における音楽的な想像力育成のための一考察 --- サウンドエデュケーションを手掛かりに ---」『中国学園紀要』20, pp159-167

麓洋介 (2015)「保育者養成校における音楽教育についての一考察 ---「実技」「楽典」「表現」の関連付けによる総合的・段階的な指導のための授業モデル ---」『愛知教育大学幼児教育研究』第 64 号 ,pp21-26

吉川和夫 (2019)「教員をめざす学生のための「音楽理論・作曲」学習」『宮城教育大学紀要』第 54 巻 ,pp231-242